郷土室だより

第33号

昭和56年9月30日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 543－9025

切絵図考証 二〇

安藤菊二

第24 船松町

京橋区史上巻町誌（一〇七頁）に、この地「古くは飯山藩本多氏、飯野藩保科氏の邸地であったのを上地とし、宝永のころ市廛を開いて船松町一丁目と称したが、慶応三年南隣の二町目を廃して明石町に合せ単称とした」と記してある。

この町の町入用賦課規準たる小間割は『重宝録』に

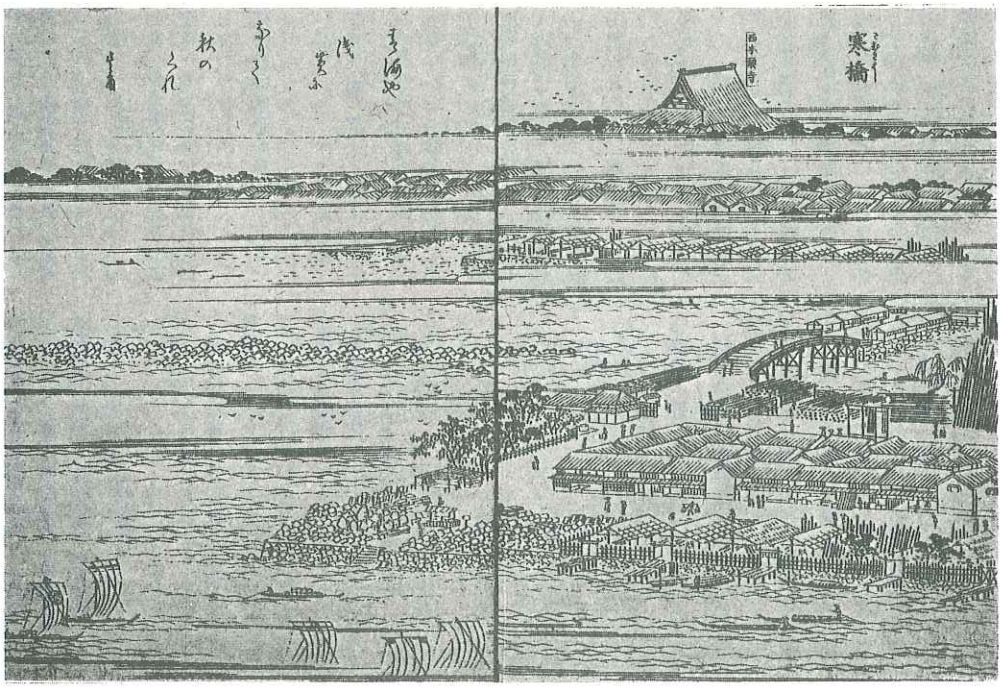
船松町一丁目　延長百六十九間五尺
　裏行、十七間より四十七間まで
同　二丁目　延長五十六間
　裏行、十間より十五間迄
同町之内　本阿弥屋敷　同四拾壱間
　裏行　十七間より十五間迄

とある。（市史稿、市街篇四〇～一七二頁）

この町の商店（諸問屋）も、本湊町と似たり寄ったりだが、商店規模は小さかったように見受けられる。嘉永の諸問屋再興時の商店を拾って見よう。

一丁目

廻船問屋　武兵ヱ地借　紀伊国屋忠兵衛
　藤蔵地借　紀伊国屋久兵衛
板材木問屋（熊野問屋組合　家持）　岡田屋甚兵衛
薪炭仲買　喜右ヱ門店　和泉屋市郎右衛門、藤七店　土屋長助、平兵衛店　信濃屋留蔵、喜兵衛店　三河屋熊次郎
雑穀仲買（安政二年加入）　遠州屋利助
地廻米穀問屋（五十六番組）　小島屋吉兵衛、遠州屋利助、古座屋権兵衛、山崎屋太兵衛
舂米屋（七番組）　伊勢屋吉兵衛、小島屋平吉郎、小島屋吉兵衛、山崎屋太兵衛
住吉組荒物問屋　家主　大坂屋八五郎
家持　岡田屋



寒さ橋（明石橋）江戸名所図会

甚兵衛
茶問屋　一番組　善四郎　地借　美濃屋治郎兵衛
地漉紙問屋　藤七店　家主　槌屋　孫兵衛
〃　幸次郎
樽職人　樽屋組　佐兵ェ店
人宿　三番組　清兵ェ店　信濃屋　勘六

などの諸店が数えられるし、少し遡って、文化十年版『十組問屋便覧』には

藍玉問屋　船松町一丁目　江島屋　利助
〃　〃　阿波屋林右衛門
鍋釜問屋　溜屋　太兵衛

の名が見出せる。藍玉問屋の江島屋と阿波屋は、文政の『江戸買物独案内』に載る有名店だった。江島屋利助は、嘉永の御用金割賦の時に三百両の賦課を命ぜられている。

二丁目

地廻米穀問屋　五十六番組　家持　藍屋弥三郎、家持　伊勢屋長右衛門、同　美濃屋忠兵衛
竹木炭薪　川辺六番組　伊豆屋吉郎兵衛
舂米屋　七番組　山崎屋太兵衛、小桝屋嘉左衛門、家主　伊勢屋長左衛門、伊勢屋市左衛門、美濃屋忠兵衛、地借　奈良屋善四郎、信濃屋勘六
住吉組荒物問屋　地借　雑貨屋惣兵衛
地漉紙問屋　家主　伊勢屋清兵衛
版木屋　日本橋組　清兵衛店　文太郎
人宿三番組　清兵衛店　信濃屋　勘六
笘問屋　清兵衛地借　雑賀屋宗兵衛
薪炭仲買　清兵衛地借　坂名屋吉五郎
重兵衛店　房州屋代吉、清兵衛地借　熊野屋忠四郎、家主　伊勢屋清兵衛
板材木問屋　熊野問屋組合　家持　都賀屋三郎兵衛
紺屋　五番組　林蔵店　市五郎
竹木炭薪問屋　川辺小網町一番組　雑賀屋宗兵衛
伊豆屋吉郎兵衛
炭薪問屋　川辺五番組　家主　伊勢屋徳兵衛
〃　川辺十五番組　小林屋重次郎
〃　川辺十八番組　佐々木藤兵衛

○船松町で行っていた年中行事の一つに、毎年五月晦日の夜、かけ念仏で、駒込富士権現へ花万度を一本奉納する行事があった。『増訂武江年表』に、この行事は、享保二年（一七一七）六月から始ったと記してあり、『兎園小説』にも、この事今に絶えず、いかなるゆゑにか猶たづぬべし、「此一条、本郷六丁目駿河屋喜太郎話也」と付記している。

これによってみると、この変った行事は、文化・文政のころにはまだ行われていたらしい。

○船松町の凧屋

山東京山の随筆『蛛の糸巻』下巻に「紙鳶」の一項があって、寛政ごろまでのいかのぼりは、今の如く（嘉永　）横骨多入れしはなし、されば価も今より下直也」と言い、その後に続けて、寛政八年の比、鉄炮洲船松町に室崎屋といへるが、今の如き手を尽した画様をなし、大凧仕立と唱へ、一枚張りでも、骨七本なるを売初しに大にはやり、予もしばしば家来にねだりてもとめさせし事なり、と幼少時代の憶い出話を書いている。

第25　十軒町

この町の小間数は、延長一四五間、裏行は一〇間から二〇間。小さな町であまり大きな問屋もない。文化一〇年版の『十組問屋便覧』を繰ってみても

綿打道具問屋　十けん丁　桔梗屋儀兵衛
紙問屋　兼、下り傘問屋　〃　小兵衛

の二軒しか眼に入らぬ。嘉永の『諸問屋名前帳』から拾えるのは

地廻米穀問屋十けん丁伊勢屋市左衛門
〃　家主　美濃屋善次郎
竹木炭薪問屋　川辺七番組　上総屋　新蔵
〃　川辺四四番組　家主　美濃屋善次郎
炭薪仲買　七番組　地借　因幡屋常右衛門、店借　越後屋甚右衛門、同　和泉屋善兵衛、同　信濃屋庄吉、万屋太兵衛
舂米屋　七番組　伊勢屋市左衛門、家主　美濃屋善次郎、越後屋寅吉、山峯屋市五郎、地借　奈良屋善四郎
版木屋　弥吉店　勝　蔵

らの一四軒にすぎない。

しかし、嘉永の御用金献納者名簿に金百両、十軒町　近江屋喜右衛門、金五十両、十軒町伊勢屋惣七の名がみえる。

○明石町

鉄炮洲の最先端に位置するこの町の地積は小さく、町の大きさは延長二九間、裏行一五間、わずかに四二五坪である。諸問屋も、

地廻米穀問屋　家持　奈良屋善兵衛
（竹木炭薪問屋、舂米屋兼業）
廻船問屋　一番組　地借　速水屋利兵衛
（竹木炭薪問屋兼業）
石問屋　地借　日野屋　安吉
笘問屋　地借　日野屋仁兵衛
炭薪仲買　店借　白子屋甚之助
紺屋　五番組　店借　庄　吉

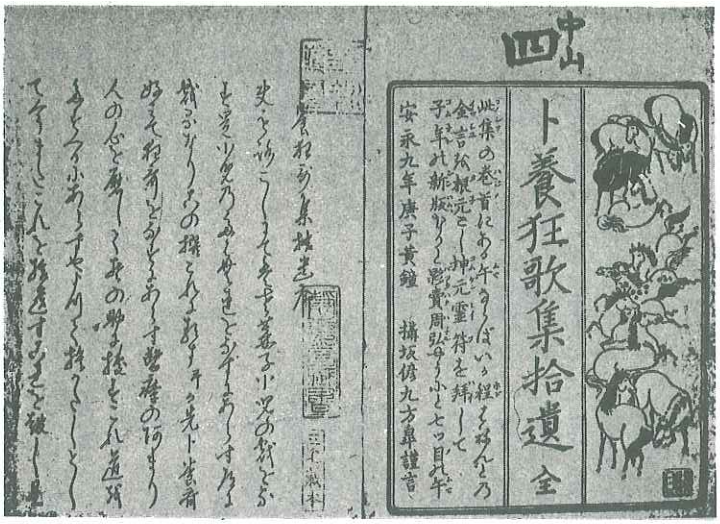
を算するにすぎない。

○半井ト養

鉄炮洲居住の聞人で名高いのは、了然尼と半井ト養である。

仏門に入るために、自ら美貌に焼きごてを当てて顔面を損じ、強烈な求道心を発揮した了然尼のことは知らぬ人もあるまいからここには省略して書かない。

半井ト養は、摂州堺出身の医者で、後、江戸に召されて御番医となり、築地明石町に屋敷を拝領した。



卜養狂歌集拾遺（静嘉堂文庫所蔵）

歌の名人の名が高かった。三代将軍（家光公）御不例の節、御召を承けて出府、御容体書を朽木民部少輔から受取って拝見し、医案など申上げたことがあるが、その節は御目見はしなかった。その後たびたび出府し、承慶二年一一月一五日初て厳有公（四代将軍家綱）に拝謁し、寛文六年一二月一五日御番医師を仰付られ、堺の跡式は弟半井一伯に譲り、江戸へ出て御用を勤めることとなり、御切米二百俵を戴き、鉄炮洲明石町に屋敷を拝領した。延宝元年一二月二八日法眼を仰付られ、同五年老衰のため退役を願い出、同六年一二月一〇日願の通り隠居仰付られ、同年一二月二六日七二才で病死、品川東海寺塔中定恵院に葬られた。法号は「牧草軒法眼雪嶺宗松居士」。卜養一代の内種々の拝領物があったが、伜卜仙誉瑞がお咎を受けたので、それらの品物がどうなったか詳らかでない。

卜養の履歴は、『東京市史稿、市街篇第八巻』（七八五～七八七頁）に『医官家譜』を引いて詳しい。漢文で書かれているのを仮名交り文に改めて記すと、

半井慶友（卜養法眼）の母は、秀吉公茶道の師匠津田宗及の女である。慶友は慶長一二年の出生。摂津堺天神町に住んで医を業とし、連歌師の間で狂

卜養が明石町に屋敷を拝領した時に

卜養は本道とこそ思いしにうみちをとるは外科がのぞみか

という狂歌を詠んだという話はよく人に知られている。賜地の年月を、東京市史稿は『寛文遺録』を引いて、「寛文九年一一月二八日」とする。

延宝五年刊行とされる『江戸雀』巻三、鉄炮洲の個所に「半井卜養横手行あたり海、右に橋あり。」と記してある。

○島方会所

半井卜養の屋敷跡は、その後町地になっていたのを、幕末に近い寛政八年（一七九六）に、代官三河口太忠が建策して、幕府の下附金をえて購入し、伊豆七島会所という会所を建設した。

『御府内沿革図書』に、

寛政八辰年二月、前書十軒町町屋地内（元半井屋敷）地元六百三拾八坪余之所、御勘定方御買上地ニ成、中程え嶋方会所出来、残地所矢張町屋ニ有レ之。

と記録してある。

島方会所は、伊豆七島の島民の経済的困窮を救う目的で設置された。伊豆諸島の物産売捌所で、十軒町会所とも八丈島会所とも呼ばれた。十軒町はずれの三角形の船入堀に面し、着船の便に富むところである。

明治四四年、東京逓信局刊行の「京橋区図」には、その地に「横浜関税派出所」と記されている。

現在は船入堀も埋立られて、「あかつき公園」となり、公園の東側は道路となってバスが奔り、様相を一変したが、明石町一三番地、三慶商事やデリス倉庫のある辺が、その旧地に当るであろうか。

会所には、勘定奉行所から普請役が町奉行所からは与力同心が詰め、それに三河口太忠の手下が加って、伊豆諸島の物産、織物、八丈染草、黄楊（つげ）木、桑寄生などを入札によって売捌いた。

伊豆七島の物産といっても、重要な物産である黄八丈は、前回記した本湊町の八丈島屋与市や八丈屋がすでに独自の販売ルートを確立していた。そうした商人の活動を封ずるわけにもいかず、さりとてこれを吸収するほどの公権力を発揮することもできなかった。

一手に販売するといったところで、物産の種類も量もすくなかったから、この専売事業は、たいした成果を挙げるにおよばずして終末を迎えたようである。

○以上を草し終ってから、『新聞集成明治編年史』の第四巻を閲覧して、明治九年一〇月一四日附の『東京曙新聞』に次のような記事の出ているのを知

った。

静岡県下伊豆国附八丈島の貢納は、旧幕府引続きにて毎年産物の織物を大蔵省へ納めますが、此程貢納物を積入れし船が無事に入津いたし、戸長差添にて昨今納め中でございます。

この新聞記事によって、徳川幕府は島会所を設置して、八丈島物産の売却の利便を計る一方、租税代りに、何反かの織物を物納させていたことが知られた。そうした物納が、明治政府になってからも引続き行われていたものとみえる。忘れられてしまったことがいろいろあるものだ。

○曽占春の罹災

明石町居住の名家で忘れ難いのは、田村藍水門下屈指の本草学者、曽槃（占春）である。別に昌啓とも永年とも称した。字は子考。占春は号である。

初め父の跡を継いで庄内侯に仕え、一九才の時辞して、本草を田村藍水に医を多紀藍渓について学んだ。寛政四年以降薩摩藩島津侯に禄仕。著書すこぶる多く、門人小沼玄龍が作った目録によれば、三四種、二八六巻におよぶという。薩摩侯は曽槃や白尾国柱らに命じて『成形図説』百巻を撰出させ、文化元年、その内三〇巻を上本した。しかるに、文化三年三月四日、高輪泉岳寺門前から出火した大火で、高輪の薩摩藩邸も全焼し、この時同藩蔵版『成形図説』の版木原稿ともに上梓を予定していた薬草部の草稿などもすべて烏有に帰した。藩では編輯局を廃し、局員白尾国柱らを帰国させ、曽占春一人に命じて菌部以下を続輯せしめた。

文化一二年の頃、占春は武州荏原の山荘にあって『橘黄閑記』三〇巻の編輯に着手している。占春が居を鉄炮洲明石橋の近くに移した年は判らないが文政一二年三月柳原から起った大火に明石町の家も類焼し蔵書および歴年の著述をことごとく焼失してしまった。

曽占春罹災の模様を、川崎正恭の『春の紅葉』に次のように記している。

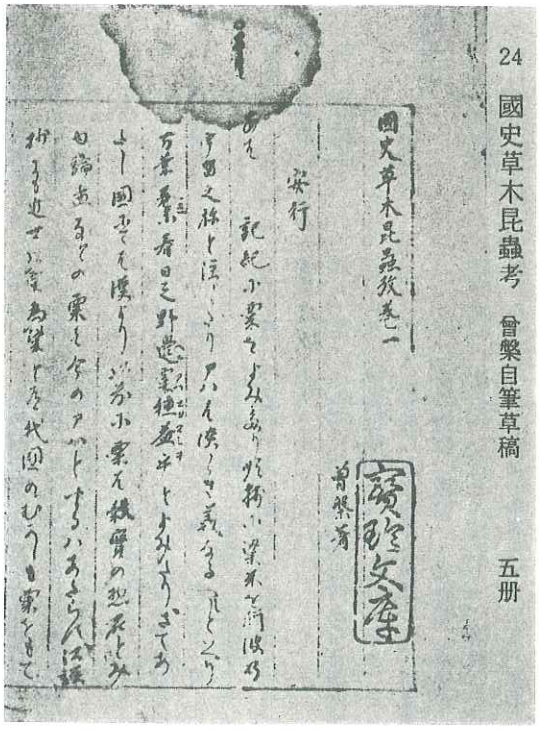
薩州の医官曽昌慶は、赭鞭家（私云、本草学者の意）のほまれ高く、年頃前中将栄翁老侯の仰によりて、万物写真の本など多く造り、いみじき博識家にて、殊に大将軍家の御台盤所のうち〳〵の仰せを奉て論語の書を和文字にて写さしむる事どもなど勤め行ふ程に此日の火に（割註）家は築地の明石町なる橋のもとにあり。さるべきものは皆塗籠に納めつ、其外人して持退では有まじき書共をば、かねて命じ置ける舟につみて、火なき方におくりたりしに、静りて後塗籠は残りたりしが、用とある書積たる船は、水にや沈みけん、火にや焼れけん、たへて行かたをしらず、年頃の勤労一時に画餅となりたる事と慷慨して、暫しは病ひうちしてありき。実にさばかり心をこめたる書共の、塗籠にさへ納めがたき程の物を、船につみて失ひけん、此老人のこころの内、おもひやるべくなん。

占春は、先年出版して手許にあった『成形図説』の版本および草稿の類を船に積んだがために失ってしまった。

占春この年七三才で、失望落胆のほどもさこそと思われる。火災後、占春は桜田の藩邸内に寓居し、南山侯の命を奉じて『成形図説』の続集の編集に従事し、天保二年には成形図説三一、菌部以下一三冊を脱稿して藩主に呈し、その三年後、天保五年二月二一日没した。行年七七才。深川富吉町正源寺に葬むられた。上野益三博士の大著『日本博物学史』に、占春の墓は、現在品川区上大崎町一ノ一〇、浄土宗常光寺にあるとして、写真を掲載しておられる。

曽占春が、火迫るにおよんで、生涯の著述を積みこみ、無事に戻れと祈念しつつ隅田川の西澪に突き放した小舟

「ホーレー文庫蔵書展観入札目録」から



は、杳として行方が知れなかったという。しかし、実際には、その積荷の一部を収得したものがあって、文字どおり「奇貨居く可し」としてこれを匿してしまい、後年これを売り払ったもののようである。文政一二年の大火から一一〇年を経た昭和一四年一〇月の、東京書林定市会の「古書入札目録」に曽槃著自筆稿本と註して、次の諸本が売りに出た。

国史草木昆虫攷　曽槃著自筆稿本　五冊
国史外品動植攷　〃　一冊
薬性討源　〃　一冊
薬圃□余　二冊合本　一冊
草窓鎖夏録

しかして、この口絵写真版に見る草木昆虫攷は、書冊の上方から中央にかけて、国史外品動植攷は、上方と下方にわたって、明らかに水しみによる汚染のあとがあった。

昭和三六年四月入札に附された、「ホーレー文庫蔵書展観入札目録」に、

図版24　国史草木昆虫考　曽槃自筆草稿　五冊

が見られた。曽占春の自筆本が、たとえ部分なりとも伝存することは喜ばしい。

○杉田成卿の被災

安政二年一〇月二日突如として江戸に起った大地震には、各所に発生した火災によって大災害が生じた。鉄砲洲船松町湊町明石町辺は大破損する民家が多った上に、十軒町の松平淡路守屋敷から燃立ち、長さ一町半余、幅平均四〇間ほどが焼失した。

この火事で、類焼した人達の中に、蘭学医の杉田成卿がいた。

成卿は高名の蘭学者杉田玄白の末っ子で、文化一四年一一月一一日、浜町山伏井戸の邸で生まれた。伝記は、富士川游博士の著作集第七巻所収の『皇国医人伝』に詳しいが、ここには平凡社版、『大日本人名辞書』に記載する成卿の伝を引いておこう。

杉田成卿、徳川末期の蘭学医、名は信、号は梅里、成卿はその字。初め儒学を萩原緑野にうけ、蘭学を名倉五三郎、三次堀専次郎に習い、二〇才の時坪井信道の門に入って医学を収め、ことに和蘭文典に通暁し、秀才の名を擅にした。天保十一年天文台の訳官となった。…安政元年五月訳官を辞し、鉄砲洲の別荘において専ら砲術学の飜訳に従事し、風来山人と号した。同二年江戸大地震に家財書類全部を失い、門人木村重太郎の羽沢の宅に寓し、ついでその地に卜居し、家号を翎沢迂叟といった。安政三年蕃所調書の開設さるるにおよび、箕作阮甫とともに挙げられて教授の職についた。間もなく病をもって辞職し、同六年一二月一九日没した。年四三。著者『砲術訓蒙』『済方三方』『済生備考』（小川）

〔補遺〕また追記事項が見当った。

このほど、松崎慊堂翁の日暦（日本芸林叢書本）を飜閲していて、天保八年七月一四日の条に「浜庇」の記事を見出て一驚を喫した。標題は「浜庇」となっているが、土岐頼旨の「浜の御苑の記」の漢訳であることは紛れもない。しかも漢文で書かれているので、全文仮名ばかりの和文より理解し易く、別本を読む思いがする。たとえば

殟（本膳、二膳、春圭塗木具、椀朱漆描二鶴亀一、銚子御紋塗、盃如レ常、食単、本膳、土佐煮、鮑串子煮古汁剝皮古知、輪切茄子、湯引半辺、加煉葛点旱菜糟蔵守口大根、二膳、塩焼鯛、猪口烹三海麩一加二砂糖一、酒二種、辣酒、名二正法院一、甜酒上所二賞御一梅酒也）

天地丸（御座設二夏褥一唐木彫莢刀架、幕用二純子一、慢羅紗猩紅、弓矢鉄砲、投鞘長柄鎗、法螺鐘鼓、船号大小不レ一、中白質赤葵、大吹貫、金幣切紙立二左右一、三挑燈、砧杵舟号、大旗小旗甚夥、紫色□紗記む字四半旗、表向井将監家所管、水主皆着二白質布染藍色

藤花衣こ）

のごとくである。漢学者の慊堂がなぜ土岐氏の『浜の御苑の記』を写したのかと思って日歴を読み返してみると、慊堂は「浜庇」を抄録する六日ほど前の七月八日に早起して東橋の芳洲公子を訪い、公子と同道して松平冠山侯の墓を展し、公子と東橋で分れてから一日中あちこち寄り途をして夜五ッ時（八時）に帰宅している。留守中に佐倉侯の家士石門が来て、手紙に添えて『浜庇』を置いて行ってと書いてあり、一四日に慊堂は『浜庇』（浜の御苑の記）を漢訳書写し、それから二・三日経った一七日に「代二佐倉侯一、題二浜庇巻一詩」を書いているのであった。

前後の事情から推して、佐倉侯（堀田正睦）は、土岐頼旨から『浜の御苑の記』の題詩を懇望され、いなみがたく、慊堂先生に代作を依頼したものだったことが知れた。これで『慊堂日歴』に、頼旨の拝観記が漢訳されて載っている理由がよめた。筆ついでに、慊堂の代作詩を写しておくこととする。

浜苑陪二游豫一。秋風仙馭臨。違顔才咫尺。満意度二丘林一。抗□滄池釣。軋鴉彩鶴音。午殟頒二上膳一。法酒各盈レ斟。境想二蓬瀛勝一。思如二溟渤一深。謝才何以報。聊寄二白蘋吟一。

資料案内

―「郷土室だより」附録地図解説―

今回は、「郷土室だより」の附録として地図を三点刊行したので、その地図の解説を兼ねて、当館所蔵の地図を紹介することとする。

「郷土室だより」一四号から始まった安藤菊二氏による『切絵図考証』も今回で二〇回を数える。その都度切絵図の部分を図版で掲載してきたが、部分を繋ぎ合わせて全体像をつかむのもなか〳〵難しい。そこで今回附録として、尾張屋板切絵図と、それを現代と比較できるように、明治のいわゆる郵便図と現況図（二千五百分一東京地形図から編纂）の三点を一組として刊行することとした。江戸・明治・現代の地図を対照しながら切絵図考証を読めば、興味も倍加するのではないだろうか。今年度は京橋地区（旧京橋区域）の地図を刊行し、来年度、日本橋地区（旧日本橋区域）を刊行する予定でいる。

今回附録にした江戸切絵図は、当館所蔵の『**築地八町堀日本橋南絵図**』で安政四年（一八五七）の尾張屋清七板である。尾張屋板の特色は、錦絵的な色刷りの華やかさにあると言われるように、原図は神社の赤、道路橋の黄、川堀の青、土手原の緑、町家の灰色と色彩豊かである。この図は日本橋川以南が一枚の地図に現わされているが、後には記載を詳密にする必要から、『八町堀霊岸島日本橋南之絵図』と、『京橋南築地鉄炮洲絵図』の二枚に分けて刊行された。

当館所蔵の切絵図のオリジナルは、他に嘉永四年（一八五一）刊の尾張屋板『**神田浜町日本橋北之図**』と、嘉永三年（一八五〇）刊の近吾堂板『**日本橋南芝口辺地図**』の計三点である。後者には地図の上に貼り紙をして、築地ホテル館や居留地、島原遊廓など、明治初期の変化が描かれている。当時のこの図の所有者が描いたものであろうか。その他の切絵図は、『江戸切絵図全』（人文社刊、尾張屋板のみ）『江戸切絵図』（東京堂刊、尾張屋板と近吾堂板）『日本の古地図〈江戸〉』（講談社刊）などの複刻版でみられる。又今秋、中央公論社から『江戸切絵図集成』（全六巻）として、尾張屋板、近吾堂板の他に、吉文字屋板、平野屋板も加えた全集が刊行の予定で、切絵図の人気を伺わせる。

切絵図以外の古地図で当館の所蔵しているオリジナルは次の五点である。

寛保沽券図　寛保四（一七四四）

江戸時代の土地台帳図。手書手彩色。当館所蔵は日本橋地区の16枚

国会図書館所蔵の旧幕引継書の中に京橋地区のものあり。貴重。

関八州輿地路程全図　天保八（一八三七）

酒井喜熙作　須原屋茂兵衛他刊

分間御江戸絵図全　天保一四（一八四三）

吉文字屋治郎兵衛他刊

楓川鎧之渡古跡考　弘化二（一八四五）

池田英泉作　（佃島水谷家旧蔵）

慶応改正御江戸大絵図　慶応三（一八六七）

高井蘭山作　岡田屋嘉七刊

その他複製品であるが、主な年代の地図をひろってみると次の様である。

武州豊島郡江戸庄図　寛永九（一六三二）『大日本絵図集成』

新添江戸之図　明暦三（一六五七）『東京市史稿災災篇』附図

江戸大絵図　延宝七（一六七九）『東京市史稿産業篇』附図

江戸図正方鑑　元禄六（一六九三）『東京市史稿産業篇』附図

分間江戸大絵図　享保五（一七二〇）『東京市史稿産業篇』附図

〔明和江戸図〕　明和八（一七七一）古地図史料出版刊

分間江戸大絵図　文政一一（一八二八）大日本測量刊

次に明治期の地図として付録にしたものは、明治四四年刊のいわゆる郵便図である。この図の袋表には、

東京逓信管理局編纂　各郵便局使用

番地界入　**東京市京橋区全図**

川流堂　小林又七発行

とある。原図は道路の黄、川の青、郵便局の赤などの色刷りである。『古地図の知識一〇〇』（岩田豊樹著）によると、明治二八年発行の日本橋区が第一号でその当時の発行元は北畠茂兵衛。縮尺は全て五千分の一で三〇年に全区完成。各区図とも訂正再版が多く、大正年代のものもある。

現況図は、二千五百分の一東京地形図を五千分の一に縮小して、トレーシングペーパー版とした。明治図と同じ縮尺なので重ね合わせて町の変遷をたどることができるはずである。

紙面が尽きたので、付録図以外の明治以降の地図については、別の機会に紹介したいと思う。（尾）

◇東京を語る会　第34回

日時　十月三日（土）
午後二時～三時三十分

演題　大正の築地っ子

講師　岸井良衛氏（江戸風俗研究家）

岸井良衛氏は、岡本綺堂の門下生で歌舞伎、新派、映画、テレビと演劇界で活躍される一方、『岡本綺堂江戸に就ての話』『江戸町づくし稿』など、江戸風俗の研究家としてもいくつかの著書をお持ちです。お生まれは日本橋小網町その後新富町、築地にお住まいで青蛙房刊の『大正の築地っ子』にその頃の下町の風俗が活写されています。お誘いあわせてご来場ください。